

酒匂川流域の環境保全活動

誌名	水利科学
ISSN	00394858
著者名	沖田,ちづる
発行元	水利科学研究所
巻/号	47巻6号
巻号補足	
掲載ページ	p. 38-56
発行年月	2004年2月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



酒匂川流域の環境保全活動

沖 田 ちづる

目 次

1. はじめに
2. 研究対象流域の概要
3. 酒匂川流域と地域住民の関わり
4. 酒匂川流域の環境保全活動
 - 4.1 酒匂川水系保全協議会
 - 4.2 酒匂川流域の交流ネットワーク会議
 - 4.3 酒匂川流域の水源を守る地域連絡協議会
 - 4.4 酒匂川水系のメダカと生息地を守る会
 - 4.5 開成町ホタルの里づくり研究会
5. まとめ

1. はじめに

酒匂川は、かつては暴れ川であったが、最近では流域環境の保全活動が活発に進められている。本研究では、過去の災害状況および保全事業を整理したうえで、上下流の交流、防災と自然環境の捉え方、市民・企業・関係自治体・河川管理者などのパートナーシップの要素に着目し、流域環境保全活動のありかたについて考える。

災害状況と保全事業については、文献、既存資料、行政と地域住民の聞き取り調査、現地観察に基づいてまとめていく。また、酒匂川下流域の土地利用変化は旧版地図を用いて辿っていく。そして、環境保全のあり方を検討するために、流域環境保全活動に加わって実態調査を行い、発足に至る経緯、保全活動の特性、関係者の連携について調査する。

2. 研究対象流域の概要

酒匂川は、静岡県富士山東麓に源を発し、もろい緑色凝灰岩からなる西丹沢山塊から流出する河内川と合流して南下し、さらに平野部で川音川、狩川と合流して相模湾に注ぐ（図1）。幹川流路延長は約46 km、流域面積は約582 km²である。酒匂川流域は、静岡県・神奈川県にまたがり、小田原市・秦野市・南足柄市・御殿場市、中井町・大井町・松田町・山北町・開成町・小山町の4市6町からなっており、流域内人口は、586,436人である。酒匂川は扇状地性河川で、洪水のたびに流路の位置を変えてきた。酒匂川の水は、約6,000 haを対象とする灌漑用水として、また、神奈川県下全域へ上水道用水として供給されている（神奈川県土木部河港課，1987；神奈川県松田土木事務所，1999；酒匂川水系保全協議会，2000）。

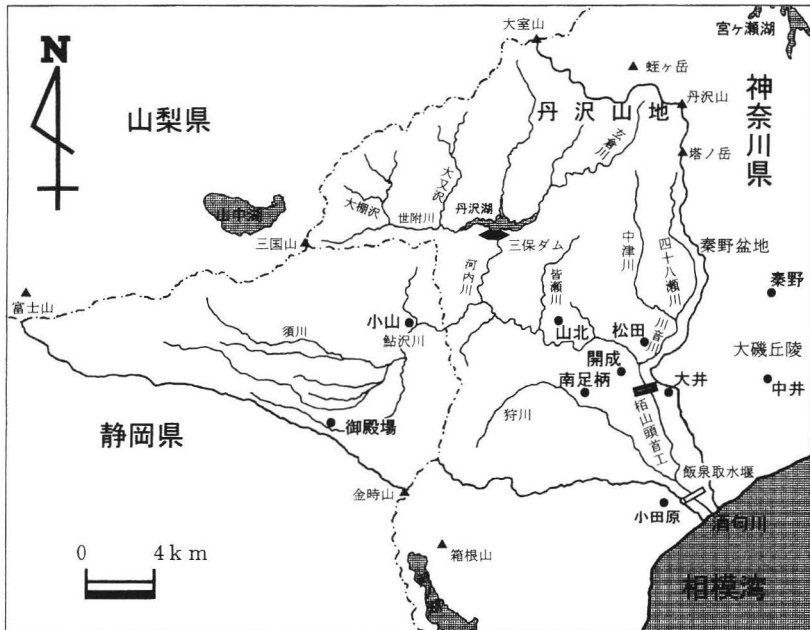


図1 酒匂川流域の概要

注）神奈川県土木部河港課（1987），神奈川県松田土木事務所（1999），
酒匂川水系保全協議会（2000）より作成。

下流域に発達する足柄平野は、相模湾に向かって南東方に開けており、北東部に大磯丘陵、北西部に足柄山地、そして南西部は箱根火山で限られる（図2）。

大磯丘陵は、周囲を断層によって限られた東西約15 km、南北約10 kmの隆起地塊である。大磯丘陵の地質は、丘陵の南東部に露出する高麗山層や鷹取山礫岩などの新第三系を基盤として、前期更新世以降に堆積し、変形隆起した第四系の堆積岩や火山岩で構成される。足柄平野と大磯丘陵の境は、縦ずれ成分を主とする活動度A級の国府津・松田断層崖である（開成町，1994；地質調査所，1997）。

足柄山地は、丹沢山地の南縁に沿って東西方向にのびるやや低い標高の山地で、鮮新・更新世の足柄層群とそれを貫く火成岩で構成される。丹沢・足柄両山地の境界には神縄断層があり、断層を境に、北側の丹沢層群が南側の足柄層群に乗り上げている。丹沢層群は、中新世の緑色凝灰岩で、大地震や集中豪雨の際には、不安定な斜面で崩壊が多発している（開成町，1994；地質調査所，1997）。

箱根火山は、中期更新世の中頃から活動を始めた大規模な成層火山で、広大な古期外輪山斜面を広げている（開成町，1994）。

足柄平野は、酒匂川および川音川より形成される扇状地性の平野で、河床勾配は、河口から扇頂まで約1/185である。酒匂川沿いには自然堤防があり、開成町には、金井島・吉田島・牛島など自然堤防につけられた地名が多く、古い集落はその上に立地している。小田原市では、栢山・飯田岡・小台・桑原・扇町の一部などが自然堤防上の集落である。国府津・小田原間の海岸沿いには幅の狭い沿岸砂州が発達している。平野の東縁および北縁には、小扇状地群が発達し、集落は扇面上に立地している。また、流路の人工的な固定が進んだことにより、天井川が見られる（開成町，1994；香川・石田・井上，1964；神奈川県松田土木事務所，1999）。鴨宮付近には、御殿場泥流がわずかに隆起した鴨宮台地が発達している。平野の北東縁、松田山南縁、狩川や内川、山王川沿いには、立川面相当の段丘面が広がっている。箱根新期軽石流の堆積面の大部分は平野の縁辺部に分布しているが、例外的に平野内にも分布して下曽我付近の千代台地を形成している（図2）。この台地は、標高30 mであり、現成扇状地面より約10 m高くなっている（開成町，1994）。

起こし、そのたびに流路を変え土砂をまきちらしてきた（香川・石田・井上、1964）。

過去の主な災害状況は、表1に示す通りである。

酒匂川流域における河川事業が本格的に行われたのは、1592年頃からであり、小田原城主の大久保氏が平野の扇頂部に春日森堤・岩流瀬堤・大口堤（大口3堤）を築いたのが始まりとされ、この改修によって平野全体で水田耕作が可能になった。それまで分流していた酒匂川、皆瀬川、川音川などが1本にまとめられ、この工事では霞堤が導入された。その後、田中丘隅が、1707（宝永4）年の富士山噴火後の水害で決潰した堤防を復旧し、1726年に文命堤を築造した。しかし、築堤から8年後に岩流瀬堤・大口堤が決潰してしまったため、蓑笠之助が独自の改良を加えた工法を用いて、1735年に両堤を再建した。以後、現在に至るまで、両堤防の決潰はない。また、蓑笠之助は、川音川との合流地点の三角土手を1734年に築造した（神奈川県松田土木事務所、1999；神奈川県南足柄市総務防災部防災課、2001；酒井、1975）。

明治以降は、1877年の災害復旧のため、1888年に開成町金井島地先に新堤が築造された。1938年7月の洪水によって大破した九十間堤の復旧工事は、1939～1941年に進められた。戦後大水害の時代¹⁾には、1949～1950年の災害復旧として、大口橋右岸の護岸補強工事が1951～1952年に進められ、1953年の災害復旧では、高瀬橋右岸に水制が施工された（神奈川県松田土木事務所、1999）。

戦後は酒匂川流域の開発が急速に進み、治水安全度を高める必要があったため、1961年から17年の歳月をかけて、山北町河内川に設けられた三保ダム（ロックフィル式・土質遮水壁型）は多目的ダムであり、1978年には丹沢湖が形成された。従来、飯泉地点における計画高水流量は $3,400 \text{ m}^3/\text{sec}$ であったが、洪水時には三保ダムの貯水地水位標高 $321.5 \sim 316.8 \text{ m}$ 間の容量 $1,000 \text{ 万 m}^3$ を利用して、ダム地点における計画高水流量 $2,100 \text{ m}^3/\text{sec}$ のうち $850 \text{ m}^3/\text{sec}$ を調節する洪水調節機能を持たせている（神奈川県県土整備部三保ダム管理事務所、1981）。現在は、台風や大雨の多い洪水期（6月15日～10月15日）にはダム湖の水位を下げ、残りの渇水期には満水にしている。

図3に示すように、近代的な改修は、中～下流域において1964年以降という早い時期に行われ、上流域では1992年以降という比較的新しい年度にかけて進められた。1972年の西丹沢集中豪雨以降は甚大な水害被害はなく、1973年に災害復旧してからは破堤していない。このように堤防が増強されて、安全になっ

表1 酒匂川流域における過去の主な災害状況(1)

年 代	水 害 状 況
1383 (永徳3)	曾比被害, 真福寺西大井へ移転
1446 (文安3)	飯田岡被害, 西念寺沼田へ移転
1504~1520 (永正年間)	飯田岡被害, 玉伝寺炭焼所へ移転
1558 (永禄元)	曾比被害
1654 (承応3)	松田寒田神社被害
1658~1660 (万治元~3)	中新田被害
1660 (万治3)	酒匂川大洪水 (8月), 岩流瀬堤決潰, 田畑被害
1661 (寛文元)	岩流瀬堤決潰
1663 (寛文3)	岩流瀬堤決潰, 大口堤被害
1682 (天和2)	岩流瀬堤決潰, 斑目被害
1695 (元禄8)	酒匂川大洪水 (7月15日), 岩流瀬堤決潰, 田畑流失
1700 (元禄13)	酒匂川大洪水 (6月), 岩流瀬堤決潰
1704 (宝永元)	酒匂川大洪水 (2月)
1705 (宝永2)	酒匂川大洪水 (6月30日), 岩流瀬堤決潰, 向原被害, 田畑流失
1707~1708 (宝永4~5)	富士山の噴火により酒匂川各地氾濫被害
1708 (宝永5)	酒匂川洪水史上最大の洪水 (6月22日), 春日森堤・岩流瀬堤・大口堤決潰, 斑目被害
1709 (宝永6)	斑目被害

(2)

年 代	水 害 状 況
1711 (正徳元)	大口堤決潰, 足柄平野大半が水没
1712 (正徳2)	向原・安部新田被害
1720 (享保5)	斑目・千津島被害
1721 (享保6)	大口堤再び決潰
1726 (享保11)	吉田島堤・曾比堤決潰
1728 (享保13)	上新田被害
1734 (享保19)	酒匂川大洪水 (8月7日), 岩流瀬堤・文命堤・十文字堤決潰, 足柄平野被害
1736~1740 (元文元~5)	金手被害
1751~1763 (宝暦年間)	清水新田被害
1791 (寛政3)	関東大風雨 (8月6日), 酒匂川氾濫, 岩流瀬被害, 大口堤被害, 吉田島・曾比・栢山被害
1802 (享和2)	岩流瀬堤被害, 栢山被害
1822 (文政5)	栢山被害
1823 (文政6)	清水新田被害
1824 (文政7)	栢山被害
1877 (明治10)	金井島地先洪水被害 (7月)
1896 (明治29)	吉田島堤決潰, 曾比・栢山・堀之内・飯田岡被害

(3)

年 代	水 害 状 況
1907 (明治40)	三角土手大破
1909 (明治42)	桜井被害
1910 (明治43)	坂口堤決潰，桑原被害
1913 (大正2)	西大井被害
1920 (大正9)	三保村世附被害
1937 (昭和12)	梅雨前線豪雨（7月14～17日），足柄上郡（松田）被害
1938 (昭和13)	吉田島堤決潰
1947 (昭和22)	カスリーン台風（9月14日）により箱根丹沢山岳地に豪雨発生， 足柄上郡・小田原被害
1949 (昭和24)	デラ台風により大口橋右岸被害
1950 (昭和25)	ヘレン台風（7月29日）により大口橋右岸被害，足柄上郡被害
1953 (昭和28)	高瀬橋右岸被害
1958 (昭和33)	狩野川台風（9月26～27日）により吉田島上島堤崩壊
1959 (昭和34)	台風7号による豪雨発生（8月13日），吉田島上島堤大破
1972 (昭和47)	西丹沢集中豪雨（7月）により三保地区被害甚大， 高瀬橋右岸被害

注）香川・石田・井上（1964），神奈川県松田土木事務所（1999），神奈川県南足柄市総務防災部防災課（2001），酒井（1975）より作成。

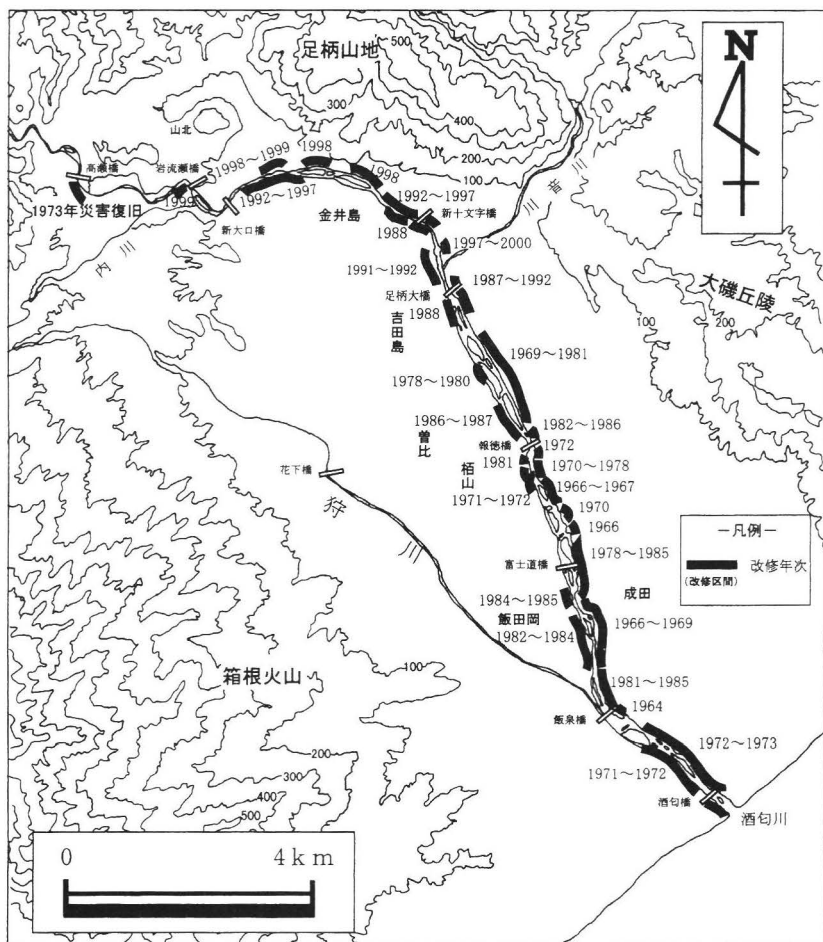


図3 戦後の酒匂川における近代的な改修状況

注) 神奈川県土木部河港課 (1987), 神奈川県松田土木事務所 (1999), 神奈川県南足柄市総務防災部防災課 (2001), 現地調査により作成。

てきたからこそ、足柄平野は都市化が進行し、最近では環境が注目されている。図4.1、図4.2に示すように、1886～1888年には微高地である自然堤防上に集落が発達し、自然地形を活かした土地利用が行われていたが、1929～1933年は、鉄道駅周辺に宅地化がみられるようになった。1969～1970年に入ると、特

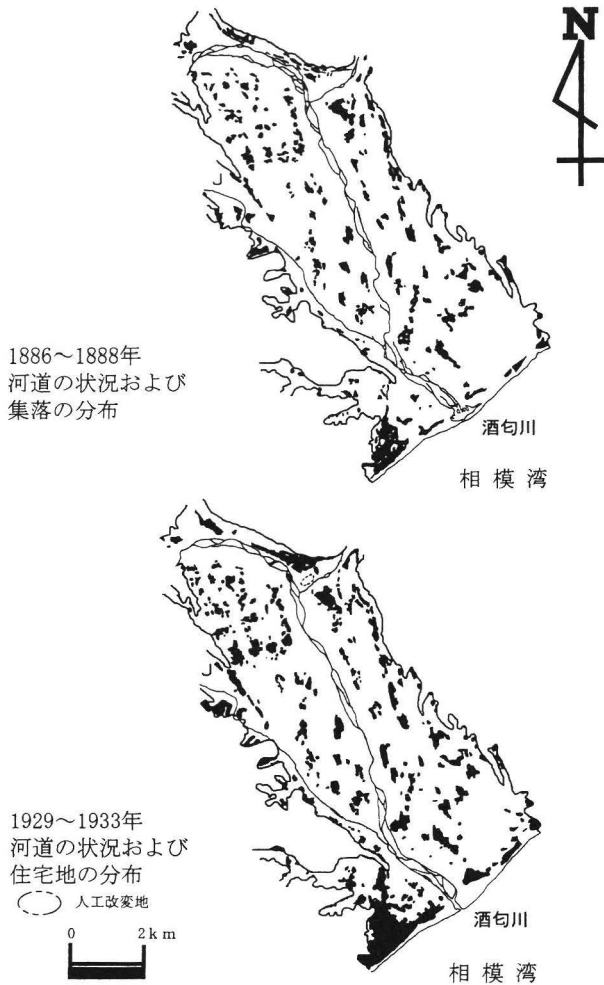


図 4.1 足柄平野における市街地化の変遷

注) 1886～1888年測量の2万分の1地形図、1929～1933年測量の2万5千分の1地形図より作成。

に小田原市周辺地域で市街地が拡大し、1995～1997年には、平野全体に宅地化が進み、人工改変地が目立つ。

近年、多自然型の河川改修が酒匂川の各箇所で行われている。開成町吉田



図 4.2 足柄平野における市街地化の変遷

注) 1969～1970年測量の2万5千分の1地形図, 1995～1997年測量の2万5千分の1地形図より作成。

島地先右岸の護岸・九十間堤右岸の護岸では、法枠の中に酒匂川の自然石をはめ込むといった改修が行なわれており、自然らしい景観を醸し出している。

酒匂川では、昔から整備されてきた堤防がレクリエーションにも利用される

例が見られるようになってきている。例えば、開成町小田急線鉄橋西端付近では、霞堤を潰して、1983年に河川敷を利用した運動公園として「開成水辺スポーツ公園」が建設された。しかし、霞堤の治水機能に対する認識が薄れていっている。酒匂川の危険性を、地域住民は心得ておく必要があると考えられる。

現在、酒匂川流域の洪水ハザードマップに関しては、これから本格的に取り組んでいく段階であり、100年に1回想定される洪水を安全に流下させるための対策が、長期的に進められている。

4. 酒匂川流域の環境保全活動

4.1 酒匂川水系保全協議会

1997年3月、神奈川県は「神奈川県環境基本計画」を策定し、流域水環境保全を進めることを決めた。その重点的対象は、水道水源となっており、複数の県にまたがっている鮎沢川・酒匂川流域である。団体（農業・漁業）・企業・関係自治体で構成される「酒匂川水系保全協議会」の事業を通して、パートナーシップによる環境保全活動を推進している。

協議会は、1960年に酒匂川流域の農業・漁業関係者が中心となって設立された団体で、当時の会員は団体・企業・流域自治体で構成された38機関であった。その後、静岡県・神奈川県が加わり、現在では101機関である。その目的は、酒匂川の水質保全を地域で組織的に取り組むことである。2000年には、創立40周年記念事業として「酒匂川・鮎沢川水系サミット」を開催した。2001年5月には日本河川協会より、第3回「日本水大賞」で表彰をうけた。環境保全活動として以下があげられている。

1) 定期的な水質調査、2) クリーンキャンペーンの実施（酒匂川統一美化活動）、3) 上下流交流事業、4) 環境保全講演会、5) 小中学生を対象とした環境教育。

4.2 酒匂川流域の交流ネットワーク会議

酒匂川をとりまく小田原市・南足柄市、中井町・大井町・松田町・山北町・開成町の2市5町と神奈川県は、地域の活性化と都市づくりの指針として、「酒匂連携軸総合整備構想」を策定し、2001年8月に住民・NPO・企業・団体・関係自治体・河川管理者からなる「酒匂川流域の交流ネットワーク会議」を設立した。

会議の目的は、酒匂川流域を1つのまちととらえ、回遊性のある交流ネットワークを生み出す圏域や、自然・歴史・文化を活かした快適都市圏域を目指すことである。現在の会員は、学識経験者1名、住民12名（在勤1名）、NPO・企業・団体12機関、行政12機関の計37機関である。NPO会員は、環境・まちづくり「県立生命の星・地球博物館友の会」・「小田原市環境ボランティア協会」・「酒匂川水系のメダカと生息地を守る会」、福祉「開成町ボランティア連絡協議会」、青少年育成「小田原シニアリーダーズクラブ」などの分野の団体が参加している。

2002年1月24日には、河口から新大口橋区間で、酒匂川の利用実態調査を実施し、酒匂川沿いの堤防や松並木、治水に関する地域資源などの保全・活用を検討していく上での基礎資料を得た。

4.3 酒匂川流域の水源を守る地域連絡協議会

地域住民が主体となって取り組んでいる保全活動には、「酒匂川流域の水源を守る地域連絡協議会」がある。

この団体は、上流の山北に産業廃棄物処分場が計画されたことに対して、1987年に水源と水質域保全についての話し合いが始まり、1992年に設立された。会員は70人・機関で、「酒匂川水系のメダカと生息地を守る会」・「農の会」・「久野の環境を守る会」・「縄文の会」・「あしがら庭林の会」・「小田原フォーラム」などの団体が協議の場を持ち、森林・里山・生態系の保全と、福祉・医療施設の充実を図っている。これまでの主な活動は、以下がある。

1) 都市計画道路による影響を避けるため、小田原メダカの保全チームを結成。2) 無農薬・有機農業の展開。3) 農・食・住を対象とした久野定住生活文化の継承、里山の利用。4) 「酒匂塾」を通した環境教育。5) 造園学の専門家と協議し、天子台の庭林を整備。6) 上下流の住民が交流を図るために、水菜・茶・わさび・きのこ・山菜の見学会開催や、地場産木材の利用推進。7) 地域保健衛生の立場から疫学的研究を進め、地域保健チームを結成。

4.4 酒匂川水系のメダカと生息地を守る会

「めだかの学校」の歌の発祥地である小田原市内の酒匂川水系は、神奈川県内最後のメダカ生息地である。これと重なる形で道路建設を中心とした開発計画が進んでいるため、メダカや自然に関心を持つ人々が集まり、1997年に「酒

「酒匂川水系魚類調査会」が発足した。2001年には、水田地帯のメダカを中心とした豊かな生態系保全を目指し、「酒匂川水系のメダカと生息地を守る会」に再編して具体的な保全活動を進めている。会員は28人である。これまでの活動は、以下がある。

1) メダカ遺伝子調査、生息域の確認と定期調査、食性調査（プランクトン調査）。2) 生息地保護のための看板設置、酒匂川水系内の池で見つかったヒメダカなどの捕獲、水田を利用したメダカ池の造成。3) 学習会・観察会・公開調査会やシンポジウム・フォーラムの開催、「神奈川メダカサミット」や「全国めだかシンポジウム」などの報告。

4.5 開成町ホタルの里づくり研究会

足柄平野周辺部にある開成町は、町内に網の目のように水路が張り巡らされ、ゲンジボタルが全域に分布していた。ところが戦後になって、食糧増産期の農薬散布や水路の改修、急速な都市化、工場・家庭廃水の汚染、大規模な圃場整備により激減した。そこで、1988年5月に昔のようにホタルを呼び戻そうと町民有志19人が「開成町ホタルの里づくり研究会」を結成した。会員は30人である。同会は、1998～1999年に酒匂川水系保全協議会、日本鳥類保護連盟、神奈川県から表彰をうけている。これまでの活動は、以下がある。

1) ホタル・カワニナの生息実態調査と資料収集。2) ホタル・カワニナの養殖・放流と乱獲防止のための巡回指導。3) 会報「開成ボタル」の発行とホタル観察会の実施。4) 県・町に対し、河川改修にあたってホタルおよび水生生物に優しい工法を採用すべく要請書を提出。

5. まとめ

酒匂川流域の環境保全では、行政主導と住民主導の活動が共に展開されている（図5）。行政主導の保全活動は、さらに2つに分けられる。1つは、行政主導の要素が強い「酒匂川流域の交流ネットワーク会議」であり、2つは、地域住民も参加している「酒匂川水系保全協議会」である。住民主導の保全活動は、さらに3つに分けられる。1つは、連合体を成す保全活動であり、「酒匂川流域の水源を守る地域連絡協議会」がこれにあたる。2つは、「酒匂川流域の交流ネットワーク会議」・「酒匂川流域の水源を守る地域連絡協議会」といった両団体に加盟している保全活動である「酒匂川水系のメダカと生息地を守る会」

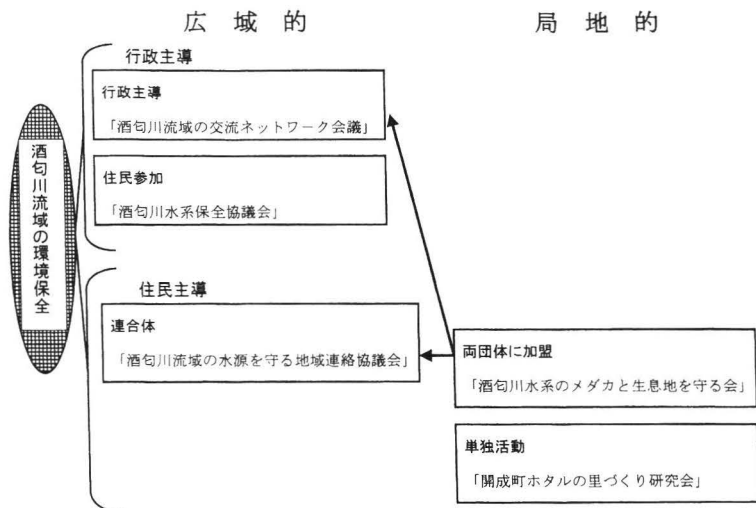


図5 酒匂川流域における環境保全活動

注) 流域環境保全活動の実態調査により作成。

があげられる。3つは、どの団体にも加盟していない単独行動の保全活動であり、例として「開成町ホテルの里づくり研究会」がある。

これらを、市民・企業・関係自治体・河川管理者などのパートナーシップの観点から考える。

「酒匂川流域の交流ネットワーク会議」は、交通網整備を軸としたテーマを設定して議論を進めており、市民・企業・関係自治体・河川管理者が相互に意見をなげかけながら一体化していくという理想型は得られていない。「酒匂川水系保全協議会」はイベントの要素が強く、また、流域自治体で形式的な議論の場を設けているが、流域住民との意見交換は活発でない。「酒匂川流域の水源を守る地域連絡協議会」は、協議会のみで独自に活動している。「酒匂川水系のメダカと生息地を守る会」と「開成町ホテルの里づくり研究会」は、それぞれ小田原市と開成町では活発に活動しているが、酒匂川流域内における他の生態系保全活動との交流は深めていない。

また、環境の捉え方すなわち、自然環境を具体的な生態系として捉えて、それを保全していこうとする意識が強いかどうかという観点からは、行政主導はあまり強くはなく、一方、住民主導は強いことがわかった。行政主導型活動は、

多様な要素を含んでいるため、空間的には広域だが、環境保全に限った内容は浅くなっている。一方、住民主導型活動は、対象が限定されているため、空間的には狭いものの、深みのある保全活動を進めている。しかし、連合体としてまとまった場合には、必然的に多様な内容を持つことになるため、空間的には広域だが、あまり深い内容で展開していない（図5）。

酒匂川流域の環境保全活動の現状としては、各々の活動が連携してパートナーシップを図ることが困難となっている。今後は、各々の保全活動が意見交換でき、役割分担を協議できる場を設けて、総合的に流域環境を捉えていくことが必要であり、また、流域環境保全活動に防災と親水をかねそなえるべきだと考えられる。

謝 辞

本研究では、お茶の水女子大学に提出した2002年度修士論文の一部を加筆修正したものであり、お茶の水女子大学の杉谷隆教授をはじめとする地理学教室の諸先生方にご指導を賜りました。なお、現地調査および文献調査においてご協力頂いた、「開成町ホテルの里づくり研究会」の井上義光さん、「酒匂川流域グリーンフォーラム」、「酒匂川水系のメダカと生息地を守る会」の山田純さん、小田原市環境部環境保全課、神奈川県小田原土木事務所、神奈川県環境農政部大気水質課、神奈川県県土整備部都市計画課、神奈川県県土整備部三保ダム管理事務所、神奈川県松田土木事務所、財団法人山北町環境整備公社、丹沢湖記念館・三保の家、の方々に厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 1948年9月のアイオン台風では、支流である狩川・内川が甚大な災害を受け、神奈川県は狩川・内川の改修を進めるため、1948年11月に狩川・内川の災害復旧事業を実施した。

参考文献

- 青木貞男（1988）：酒匂川右岸の霞堤考察 その九十間堤と祖師堂．開成町教育委員会編『開成町史研究第2巻』，開成町，pp.48－87.
- 伊藤晶子・笹賀一郎（1993）：土地利用と保全事業の歴史的経過と今後の方向性－北海道北部・間寒別川流域の事例から－．水利科学第37巻2号，pp.64－81.
- 井上義光（1988）：『昭和63年度 開成町ゲンジボタル生息実態調査報告』，開成町ホ

- タルの里づくり研究会, 21 p.
- 井上義光 (1990): 『平成2年度 開成町カワニナ生息実態調査報告』, 開成町ホテルの里づくり研究会, 16 p.
- 井上義光 (1998): 開成町ホテルの里づくり研究会会報開成ポタル第5・6合併号, 14 p.
- 今本博健 (1994): 全国市町村の防災活動と住民の防災意識について. 京都大学防災研究所年報第37-B2号, pp.529-537.
- 内田和子 (1998): ため池の決壊による水害の事例分析 (I) - 1868年における愛知県入鹿池の事例 -. 水利科学第42巻5号, pp.50-66.
- 内田和子 (1999): ため池の決壊による水害の事例分析 (II) - 1868年における愛知県入鹿池の事例 -. 水利科学第42巻6号, pp.54-69.
- 大石 力・高橋 裕・榛村純一 (1995): 『流域の時代 - 森と川の復権をめざして -』, ぎょうせい, 281 p.
- 大熊 孝 (1988): 『洪水と治水の河川史』, 平凡社, 261 p.
- 大矢雅彦・木下武雄・若松加寿江・羽鳥徳太郎・石井弓夫 (1996): 『自然災害を知る・防ぐ第2版』, 古今書院, 257 p.
- 小田原市広報広聴室 (2001): 広報おだわらまちづくり情報誌第800号, pp.4-22.
- 小田原市防災部防災対策課 (2000): 『平成12年度水防演習実施概要』, 小田原市防災部防災対策課, 12 p.
- 開成町 (1994): 『開成町史自然編』, 開成町, 370p.
- 香川幹一・石田一雄・井上義光 (1964): I 水の足柄平野. 浅香幸雄監修『日本地理集成第4巻 神奈川県地理』, 光文館, pp.220-223.
- 河川審議会 (2000): 経済・社会の変化に対応した河川管理体系のあり方について (答申素案). 緑の読本第36巻12号, pp.93-102.
- 神奈川県県土整備部三保ダム管理事務所 (1981): 『三保ダム酒匂川総合開発事業の概要』, 神奈川県県土整備部三保ダム管理事務所, 11 p.
- 神奈川県県土部河港課 (1987): 『酒匂川河川環境管理基本計画』, 神奈川県県土部河港課, 14 p.
- 神奈川県内広域水道企業団 (1985): 『水道企業団15年史』, 神奈川県内広域水道企業団, 527 p.
- 神奈川県松田土木事務所 (1999): 『松田土木事務所100年のあゆみ』, 神奈川県松田土木事務所, 108 p.
- 神奈川県南足柄市総務防災部防災課 (2001): 『アイオン台風による災害記録集 - 昭和23年9月 -』, 神奈川県南足柄市総務防災部防災課, 136 p.
- 狩野謙一他 (1984): 丹沢南部・大磯丘陵周辺における中期更新世以降の断層活動. 第四紀研究第23巻2号, pp.137-143.

- 岸川敏朗・山本幹雄（1996）：県域を超えて取り組む桂川・相模川流域の環境保全行動の推進。生活と環境第41巻11号，pp.28－37.
- 木平勇吉（2002）：『流域環境の保全』，朝倉書店，133 p.
- クリスチャン・ゲルディ，福留脩文訳（1994）：『近自然河川工法の研究』，信山社サイテック，100 p.
- 建設省河川局治水課（1993）：『洪水氾濫危険区域図』，河川情報センター，30 p.
- 酒井茂男（1975）：『酒匂川（特集号）－酒匂川の沿革と氾濫の歴史－』，酒匂川水系保全協議会，170 p.
- 相楽 治（2000）：多彩な川守の“川業”による河川管理へー川の再生は川の総合生命産業，“川業”としての市民事業で－。河川第652号，pp.45－51.
- 酒匂川水系保全協議会（2000）：『酒匂川創立40周年記念号』，小田原市環境部環境保全課，101 p.
- 酒匂川流域の交流ネットワーク会議（2002）：『酒匂川流域の都市づくり～酒匂連携軸総合整備構想の推進～中間とりまとめ』，神奈川県県土整備部都市計画課，18 p.
- 酒匂連携軸総合整備構想地域検討会（2002）：『酒匂川流域の都市づくり～酒匂連携軸総合整備構想の推進～』，神奈川県県土整備部都市計画課，4 p.
- 桜井善雄（1991）：『水辺の環境学－生きものとの生存－』，新日本出版社，222 p.
- 島谷幸宏（1999）：河川管理における自然環境の保全についての基本的考え方。応用生態工学第2巻1号，pp.47－50.
- 高瀬和昌（1973）：近世治水思想に関する一研究－酒匂川文命堤の事例を中心として－。水利科学第17巻4号，pp.73－104.
- 田中正夫（1975）：丹沢山地の崩壊地における岩屑生産。地理学評論第48巻，pp.261－274.
- 田中正夫・森正樹（1976）：丹沢山地東北部における最近の山崩れに起因する侵食量の推定。地理学評論第49巻，pp.236－248.
- 地質調査所（1997）：『50万分の1活構造図 東京（第2版）説明書』，地質調査所，34 p.
- 辻本哲郎・池内浩司・吉村伸一・角野康郎・森 誠一・浅枝 隆（2000）：多自然型川づくりシンポジウム報告。応用生態工学第3巻2号，pp.255－270.
- 中村好男（1989）：文命用水と酒匂川右岸地区の農村環境。農業土木学会誌第57巻11号，pp.21－26.
- 西田一雄（1996）：水辺環境整備の動向とこれからの視点。環境技術第25巻12号，pp.50－55.
- 日本の地質『関東地方』編集委員会編（1993）：『日本の地質第3巻 関東地方』，共立出版，276 p.

- 松澤 譲 (1993): 地域社会と流域管理 (Ⅰ) 筑後川・矢部川流域を例として, 水利科学第37巻 3号, pp.33-44.
- 松澤 譲 (1993): 地域社会と流域管理 (Ⅱ) 筑後川・矢部川流域を例として, 水利科学第37巻 4号, pp.52-67.
- 松澤 譲 (1993): 地域社会と流域管理 (Ⅲ) 筑後川・矢部川流域を例として, 水利科学第37巻 5号, pp.54-68.
- 山崎晴雄 (1993): 南関東の地震テクトニクスと国府津・松田断層の活動, 地学雑誌第102巻 4号, pp.365-373.
- 山田 純 (2002): 『酒匂川流域の地メダカの保護—その思想的検討』, 酒匂川流域グリーンフォーラム, 8 p.
- (財) リバーフロント整備センター (1992): 『まちと水辺に豊かな自然をⅡ多自然型づくりを考える』, 山海堂, 185 p.
- (財) リバーフロント整備センター (2000): 『ともだちになろうふるさとの川—川のパートナーシップハンドブッカー』, 信山社サイテック, 127 p.

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程)